

老松

長唄

全詞章

四世杵屋六三郎

作詞・作曲

文政三年（一八二〇）

〔本調子・次第〕 実に治まれる四方の国々、四方の国々、関の戸さきでかよはん

これは老木の神松の、千代に八千代に細石の、巖となりて苔のむすまで

松の葉色もときめきて、十かへり深き緑のうち、寝れる夢のはや覚めて、

色香にふけし花も過ぎ、月に嘯き、身はつながるる糸竹の縁にひかれて、うつらうつらと

長生の、泉をめぐる心地せり

まづ社壇の方を見てあれば、北に峨々たる青山に、彩る雲のたなびきて、

風にひらりひらめきわたる此方には

翠帳紅閨の粧ひ、昔を忘れず、右に古寺の旧蹟あり

晨鐘夕梵のひびき絶ゆることなき眺めさへ、赤間硯の筆すきみ、ここに司をしるしけり

松といふ文字は変れど、待つ言の葉のその甲斐あつて積む年に

寿祝ふ常磐木の、調べぞつづく高砂の、名あるほとりに住吉の、松の老木も若木をかたる、

恥かしき、喜びも理ぞかし、いつまでも

清き諫めの神楽、舞楽をそなふる此の家に、声もみちたつ有難や

〔三下り〕 松の太夫のうちかけは、鳶の模様に藤色の、愛しかあいもみんなみんな、男は

偽りぢやもの

強ねて見せてもその儘よそへ、ある夜ひそかに付合の、雲の籬のかけ言葉、エエ憎らしい

木隠れに、はれて逢ふ日を松の色

豊かに遊ぶ鶴亀の、齢を授くる此の君の、行末守れと我が神託の、告を知らする松の風

富貴自在の繁栄も、久しき宿こそ目出度けれ